

# 神輿



天照御祖神社の御神輿  
(花露辺地区の社人が担ぐ)



大杉神社の御神輿  
(本郷地区の社人が担ぐ)



西宮神社の御神輿  
(小白浜地区の社人が担ぐ)

# お祭りの様子



式年大祭で奉納されてきた、主な神楽並びに郷土芸能

# 神楽

## 常龍山御神楽 [片川地区]



市指定文化財 1980年3月28日  
「片岸御神楽」は常龍山大権現といわれ現在天照御祖神社に奉納され、「権現さま」と称する獅子頭を持って舞う踊りである。御神楽に奉持される「権現さま」は初め「岩乃沢権現」といわれ、赤獅子頭であったのを、1626年に常龍山に安置され「常龍山権現」として奉持されるようになり、大津波や凶作、悪疫の流行の時、この「権現さま」を持ちだし、危難払いのために舞ったのがそのはじめであるといわれる。「権現さま」といわれるところからみると多分に山伏神楽の系統ではないかと思われるが、現在の舞型がいつ頃定まったか不詳である。

## 伊勢神楽 [本郷地区]



本郷伊勢神楽は伊達藩政時代以前の事である。その後も藩政時代に至っても代々藩主がこれを信仰して現在に至っている。海の見える高台にある大杉神社に伊勢本宮より御神体を迎えお祭りを行なったのが始めと言われている。伊勢神楽は代神楽とも言い、そのため獅子舞により家室内に舞込み悪魔払い・火伏せ・無病息災・家内安全祈禱舞をする伊勢参りの代参の意味にもあたると言われている。また昔から子宝に恵まれない方などにはオカメ舞に出舞すると子宝に恵まれるとも言われている。また身体の弱い方、頭痛みの方は獅子頭にかんでもらえば病が止むとも言われている。

## 伊勢太神楽 [小白浜地区]



太神楽は地区の唯一のものであり、その起源も元禄年間にさかのぼるといふ。鎮守八坂神社の祭典に奉納され、常に神輿の守護職として渡御の最前列にあり、先達としてその露祓いの大任を果し、その大役を勤めている。幾多の災害に痛手を蒙りながらも朽ち果てる事なく引き継がれ伝承されている。当時特に60万石の家臣千葉長門守、木村土佐守の城主の絶大な庇護のもとにあり、地区の船主・船頭たちのたゆまぬ協力によって伝承されている。太神楽の舞は「通り舞」「剣舞」等あり、幕付きの獅子頭をかぶって踊り、幕尻を持つものが後につく。踊り手は「御舞」と「鈴」「剣舞」の時は「御舞」と「剣」とを手に持ち舞う。「女舞」「おかめ」と称す、女装の衣装をして「鈴」と「扇」を手にして獅子の先になり舞をする。囃子には、笛・大太鼓・小太鼓を使用し悪魔払い。家内安全、商売繁盛を祈念しながら舞が演ぜられる。

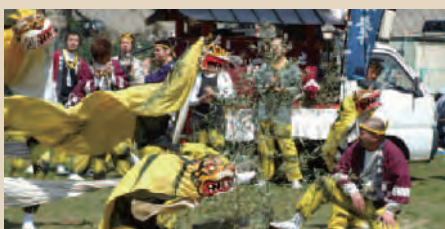
## 荒川熊野権現御神楽 [荒川地区]



荒川鎮座熊野神社は、1187年、後鳥羽天皇の御代に海上安全、火防、五穀豊穡の守護神として紀州熊野より分霊を勧請し、当地に熊野大権現を建立安置したのが始めと言われている。御神楽、即ち権現舞は庶民の信仰の対象として根強いものがあり、祭礼の先駆をなし諸霊を鎮める神であり、祝福を与えてくれる神であると信じられ、常に信仰のお供をして厄払いをする役目があると信じられ、そのように演ぜられ出現している。御神楽は創立800年の信仰と共に伝承、熊野権現の象徴として御獅子を型どり、威厳があり、神が御獅子の姿に化して、この世に現れ悪魔を退散させる事を誓って舞にしたものと言われている。曲目は、渡り囃子から始まり、御神楽、地の守、駒囃子、太神楽と四つの舞で構成され最後に御神楽を舞渡り囃子で退場する。

# 虎舞

## 小白浜虎舞 [小白浜地区]



虎舞は海岸特有のものであり、囃子舞ともに勇壮で、本来の獣性を有し、熟睡から醒めた猛獣の所作で、海で生きる者の血をそそり、浜っ子の気風をそのまま遺憾なく発揮している。由緒については、三嶋家の祖先が浜の不漁続きの時に海に先きける若者を鼓舞激励する為工夫創案したものと伝えられている。「三嶋の虎舞」は、囃しことばに「三嶋の虎舞はね虎舞一杯のまねば気がすまねえ...」とあることから極めて勇壮な虎舞である。

## 大石虎舞 [大石地区]



慶長年間奥州の豪族葛西三郎の家臣であった、新沼善次郎が気仙の立根に伝えたのが始めという。虎舞はその乱拍子とともに頭の揺れ動き、その演技のいかんにより、その年の豊凶を占うとされ、災厄を払って豊漁をもたらすという、心意の働いているものと言われる。和藤内が虎の背にまたがって、「天照皇太神宮」の神札をかかげるところは獅子舞の根源である伊勢信仰が反映しているものと思われる。舞は2部に分かれ、1部は「笹踊り」猛虎を奪い合う場面。2部は「御神楽」猛虎を承服させ、敵軍を家来にして御祝をする場面。

# 太鼓

## 花露辺海頭荒神太鼓 [花露辺地区]



唐丹町花露辺に鎮座する「海頭荒神社」から、その名を取ったもので、今から約60年前の「釜石さくら祭り」に花露辺地区の青年会が中心となって手踊り太鼓として演奏したのが最初である。それ以来、太鼓の師匠の高橋和雄氏が中心となって「馬鹿ばやし」というリズムを基礎として創作を重ね、1982年に現在の5部構成をもって演奏するようになった。第一部「そりい太鼓」、第二部「荒神太鼓」、第三部「御祝太鼓」、第四部「大漁太鼓」、第五部「みだれ太鼓」

## 桜舞太鼓 [本郷地区]



本郷地区の手踊り太鼓として、1953年に発足した。特徴は、桜の花びらが舞踊る様をイメージした、一糸乱れぬ勇壮な撥さばきにあり、技を考案した三浦徳松氏の指導のもと、その技を磨き約60年間守られてきた。1989年に、本郷青年会を廃し鼓舞舞櫻会を発足し、自由な発想を持って和にこだわらない創作活動を行っている。

# 手踊り

## 小白浜手踊り [小白浜地区]



## 本郷手踊り [本郷地区]



## 花露辺手踊り [花露辺地区]



# 侍組の各地区別の役割

## 本郷



御徒組



杖供組

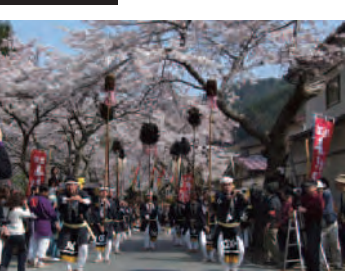


杖引組



御鷹匠

## 小白浜 御道具組



## 山谷 御鉄砲組



## 荒川 御並槍組



## 大石 御弓組



その他、袴姿の氏子多数が加わります。

